

作品への視野をひらく古文の読解指導

— 古文学習指導三年間のあゆみをふりかえって —

北川 真一郎

はじめに — 随想風に —

「古文は好きですか？」と尋ねて、「嫌いです」と言われると応える。だから日頃そんな野暮な質問はしないようにしている。授業をやっていて、「こいつは古文のことがまんざらでもないな」と感じられる生徒を見つけてはひとりほくそ笑むことにしている。受験指導の名のもとに、古文嫌いを生み出しているに違いないという負い目からくる自己防衛である。

しかし、受験指導が諸悪の根源だと言い募ってみても始まらない。冷静に、そして客観的に、あるいは自己批判として受験指導の問題点を洗い出してみると、そこには好悪の感情を許さない読解至上主義があることに気付く。そもそも、ある物事が好きになるということは、嫌いであることと表裏一体である。嫌いなものがあるから、好きなものがある。そんな素朴な感情の表出を促すところから古文の学習は見直されるべきではないか。「古典」という権威を押しつけるのではなく、ひとつの作品とかがかわる自由を生

徒に委ねたいと思う。

ところで、好悪の感情とは言語的抵抗のレベル、つまり難解であるか否か、によるものではなく、「価値」に関わるものでなければならぬ。そのためには、言語的抵抗をやわらげる教材の工夫はもちろんのこと、作中人物、あるいは作者の生き方、価値観に関わる読みが求められなければならない。言語表現の結果としての意味ではなく、それを生み出した作者の、あるいはそれを体現している作中人物の生き方を問う「意味」の探究が目指されなければならない。

一 三年間の教育課程について

本校では、学校週五日制への移行と、新教育課程の主旨を踏まえて、平成七年度から六十五分授業・二期制を実施している。新制度導入とともに入学した五十回生の国語の教育課程は次のとおりである。なお、数字は2週間あたりの授業時数を表している。

（教育課程表）

三年		二年				一年		現代文	古文	漢文	古典文法	演習
		理系		文系		一年						
前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期					
3	3	3	3	3	3	4	3	3	3			
		3 4		3 3		4 3		2 2		1		
		2		2 2		2 2						
		3		2								

六十五分授業は必然的に授業回数減少につながる。予習・復習を含めた学習全体の充実を図るためにも、自ら学ぶ力が、授業から家庭学習へと無理なく発展・拡充していくような指導方法を確立し、授業を核にして家庭学習をも視野に収めた総合的な指導計画の立案に努めなければならない。

また、二期制では一回の定期考査の出題範囲が従来よりも広くなる。特に、前期中間考査・後期中間考査に向けての期間は、いぶんの長い学習が展開される。指導者自身が学習目標を明確に提示し、学習者に「いま、なぜ、この教材を学習するのか。そしてこの学習によってどんな力を養うのか」をはっきり自覚させ、目的意識と意欲をもって学習に取り組めるようにしむけることが何よりも大切である。

二 古文の単元学習について

このような考えや方針に基づいて、「作品ごとの単元」

を編成して古文の学習指導を行った。

まず、学年ごとに中心となる作品を精選する。ひとつの作品について多面的に、あるいは時間軸・主題軸に沿って継続的に学習しないと、「価値」の深みには到達し得ない。たとえば、「竹取物語」の場合、冒頭と昇天の部分だけを読んだのでは、すでに知っているおとぎ話を古文でたどり直しただけに終わってしまうかねない。少なくとも帝の求婚の一節（欲を言えば、さらに倉持皇子か阿部御主人）を加えることよって、主題について考える視野がぐっと広がるはずである。

そのためには、授業を核としつつ長期休業中の補習や課題も含めた単元学習を構想する必要がある。ただしこれにはある程度の古文の学習力が前提となるので、二年次から本格的に取り組んだ。単元は、ほとんど同一作品によつて構成した。古文の学習を体験として心に刻む単位は、やはり「作品だと思っうからである。もちろん、この三年間でもっともたくさん読んだはずの『徒然草』にしても「作品全体からすれば、ほんの一部に過ぎない。しかし、その内のどれかひとつでも心に留まるものがあれば、それが後になって自ら『徒然草』を繙く機縁にもなるだろう。そうした興味・関心の発展を促すために、テキストの中にできるだけ、注釈書や入門書、あるいは古典評論や随筆などを組み入れるように心がけた。

三 三年間の古文学習の流れ

ここで、三年間の古文学習を振り返ってみることにする。なお、補足の項には単元のねらい、指導の留意点、反省、展望などを書き添えた。

一年次 (二・三年次は文系のもの。 *は教科書以外の教材。)

は、一部のクラスのみで扱った教材。)

テキスト	単元と教材	言語事項	課題学習及び補足
4	「新訂 国語」(第一学習社)	「解説」読解のための明説 古文法(文法)出版 古文法(文法)出版	「古典文法」1「法解演習」(龍谷出版)
5	1 余文(入門) 2 兄の遺書(『政治遺物語』) 3 松尾節貞(同)	1 動詞 2 形容詞・形容動詞	授業教材と重なるものは、授業と並行して学習させる。
6	1 余文(草)―先達の教え―補1 2 つれづれなるまゝに―序段 3 余文(終)―終―補2 4 能をつかんとする(二五〇段) 5 ある若手法師になつて(二八八段)	1 助動詞(1) (る・らる ・す・さす)しむ 2 助動詞(2) (き・けり ・ぬ・たり) 3 助動詞(3) (むず ・らむ・むむ・べし)	補1 教訓を説くための語法の面白さを味わわせ(一七八段、また、自分の生活を振り返りて具体的な例を挙げさせて九二段、一五〇段、と古典の世界を共感的に受けとめる接点を見出させる。
7	1 余文(終)―先達の教え―補3 2 余文(終)―終―補4 3 余文(終)―終―補5 4 余文(終)―終―補6 5 余文(終)―終―補7	1 助動詞(4) (ず・じ ・まじ)めり・なり・た 2 助動詞(5) (まし・ま ほし・たし)ことし	補2 善良な翁はかぐや姫の結婚をめぐるつれづれなるまゝに目覚め、最終的には愛敬を失う悲しみか、あはれに目覚めり捨ててかぐや姫に永遠の思慕を捧げる。物語は「死」と「あはれ」という人間存在の根本ユートピアを相対化している。
9	1 余文(終)―無常と兵の某相方(補3) 2 世に從はる人は(二五五段) 3 夜に入つて(二九二段) 4 寒野(補)―谷崎(一)段 5 △あだしの野の露(七段) * 6 芥川(伊勢) 七段 7 東下り(伊勢) 九段 8 あづさ(伊勢) 二四段	1 助動詞(5) (まし・まほし・たし)ことし	補3 兼好の無常観は、自然美の認識として、あるいは美的生活の實踐として、あるいは人生の理想として、あるいは超えて理想を共感的に理解させるためにも、必要となり得る。はや死語になりつつあることばを大切に扱わねばならない。人生の無常(死)の理解は、兼好の提示する事物に対しては、かなぬものをいとおしむ思いを抱くことによつて可能になる。
10	1 余文(終)―無常と兵の某相方(補3) 2 世に從はる人は(二五五段) 3 夜に入つて(二九二段) 4 寒野(補)―谷崎(一)段 5 △あだしの野の露(七段) * 6 芥川(伊勢) 七段 7 東下り(伊勢) 九段 8 あづさ(伊勢) 二四段	1 助動詞(5) (まし・まほし・たし)ことし	補4 「徒然草」を支えているのは、作者兼好の人間に対する旺盛な好奇心である。出家遁世への関心で悶々とした俗世のものがあつた。無常の認識は、兼好の人間性である。死の恐怖を知りて、達人ならではの悲観的知識に膝を打つような説教體験を
11	1 余文(終)―無常と兵の某相方(補3) 2 世に從はる人は(二五五段) 3 夜に入つて(二九二段) 4 寒野(補)―谷崎(一)段 5 △あだしの野の露(七段) * 6 芥川(伊勢) 七段 7 東下り(伊勢) 九段 8 あづさ(伊勢) 二四段	1 助動詞(5) (まし・まほし・たし)ことし	補4 「徒然草」を支えているのは、作者兼好の人間に対する旺盛な好奇心である。出家遁世への関心で悶々とした俗世のものがあつた。無常の認識は、兼好の人間性である。死の恐怖を知りて、達人ならではの悲観的知識に膝を打つような説教體験を
12	1 余文(終)―無常と兵の某相方(補3) 2 世に從はる人は(二五五段) 3 夜に入つて(二九二段) 4 寒野(補)―谷崎(一)段 5 △あだしの野の露(七段) * 6 芥川(伊勢) 七段 7 東下り(伊勢) 九段 8 あづさ(伊勢) 二四段	1 助動詞(5) (まし・まほし・たし)ことし	補4 「徒然草」を支えているのは、作者兼好の人間に対する旺盛な好奇心である。出家遁世への関心で悶々とした俗世のものがあつた。無常の認識は、兼好の人間性である。死の恐怖を知りて、達人ならではの悲観的知識に膝を打つような説教體験を

二年次

テキスト	単元と教材	言語事項	課題学習及び補足
1	6 友を遣はば(二七二段)		補5 上佐日記の主題については、さそびた。友を遣はば(二七二段)
2	1 余文(終)―先達の教え―補5 2 兄の遺書(『政治遺物語』) 3 松尾節貞(同) 4 能をつかんとする(二五〇段) 5 ある若手法師になつて(二八八段)	1 動詞 2 形容詞・形容動詞	補5 上佐日記の主題については、さそびた。友を遣はば(二七二段)
3	1 余文(終)―先達の教え―補6 2 つれづれなるまゝに―序段 3 余文(終)―終―補7 4 能をつかんとする(二五〇段) 5 ある若手法師になつて(二八八段)	1 助動詞(1) (る・らる ・す・さす)しむ 2 助動詞(2) (き・けり ・ぬ・たり) 3 助動詞(3) (むず ・らむ・むむ・べし)	補6 兼好の無常観は、自然美の認識として、あるいは美的生活の實踐として、あるいは人生の理想として、あるいは超えて理想を共感的に理解させるためにも、必要となり得る。はや死語になりつつあることばを大切に扱わねばならない。人生の無常(死)の理解は、兼好の提示する事物に対しては、かなぬものをいとおしむ思いを抱くことによつて可能になる。
4	1 余文(終)―先達の教え―補8 2 世に從はる人は(二五五段) 3 夜に入つて(二九二段) 4 寒野(補)―谷崎(一)段 5 △あだしの野の露(七段) * 6 芥川(伊勢) 七段 7 東下り(伊勢) 九段 8 あづさ(伊勢) 二四段	1 助動詞(4) (ず・じ ・まじ)めり・なり・た 2 助動詞(5) (まし・まほし・たし)ことし	補8 兼好の無常観は、自然美の認識として、あるいは美的生活の實踐として、あるいは人生の理想として、あるいは超えて理想を共感的に理解させるためにも、必要となり得る。はや死語になりつつあることばを大切に扱わねばならない。人生の無常(死)の理解は、兼好の提示する事物に対しては、かなぬものをいとおしむ思いを抱くことによつて可能になる。
5	1 余文(終)―先達の教え―補9 2 世に從はる人は(二五五段) 3 夜に入つて(二九二段) 4 寒野(補)―谷崎(一)段 5 △あだしの野の露(七段) * 6 芥川(伊勢) 七段 7 東下り(伊勢) 九段 8 あづさ(伊勢) 二四段	1 助動詞(5) (まし・まほし・たし)ことし	補9 兼好の無常観は、自然美の認識として、あるいは美的生活の實踐として、あるいは人生の理想として、あるいは超えて理想を共感的に理解させるためにも、必要となり得る。はや死語になりつつあることばを大切に扱わねばならない。人生の無常(死)の理解は、兼好の提示する事物に対しては、かなぬものをいとおしむ思いを抱くことによつて可能になる。
6	1 余文(終)―先達の教え―補10 2 世に從はる人は(二五五段) 3 夜に入つて(二九二段) 4 寒野(補)―谷崎(一)段 5 △あだしの野の露(七段) * 6 芥川(伊勢) 七段 7 東下り(伊勢) 九段 8 あづさ(伊勢) 二四段	1 助動詞(5) (まし・まほし・たし)ことし	補10 兼好の無常観は、自然美の認識として、あるいは美的生活の實踐として、あるいは人生の理想として、あるいは超えて理想を共感的に理解させるためにも、必要となり得る。はや死語になりつつあることばを大切に扱わねばならない。人生の無常(死)の理解は、兼好の提示する事物に対しては、かなぬものをいとおしむ思いを抱くことによつて可能になる。
7	1 余文(終)―先達の教え―補11 2 世に從はる人は(二五五段) 3 夜に入つて(二九二段) 4 寒野(補)―谷崎(一)段 5 △あだしの野の露(七段) * 6 芥川(伊勢) 七段 7 東下り(伊勢) 九段 8 あづさ(伊勢) 二四段	1 助動詞(5) (まし・まほし・たし)ことし	補11 兼好の無常観は、自然美の認識として、あるいは美的生活の實踐として、あるいは人生の理想として、あるいは超えて理想を共感的に理解させるためにも、必要となり得る。はや死語になりつつあることばを大切に扱わねばならない。人生の無常(死)の理解は、兼好の提示する事物に対しては、かなぬものをいとおしむ思いを抱くことによつて可能になる。

4	「和泉式部日記」恋のかけつき 「中務内侍日記」吉原のみやげ
5	「采葉物語」(一)死と教養
6	「源氏物語」(二)春宮の御座 「源氏物語」船子はじめ
7	中句センター対策演習
前期期末考査	

姿勢と、これまで培ってきた力を確かなものにすることを意図して教材を作成した。
 「典型場面」という発想は一年前からあたためてきたもので、単に問題演習の観点から考えたいたものではなく、国文学研究における「引用」に基づいた「プル・テキスト」ものである。現在中世の物語に基づく「目指す」ものである。現在中世の物語に基づく先行作されたものが「引用した作品群」として逸脱を視野に取ることで「新たな教材発掘」と学習の展開が可能になると思ふ。

こうして三年間の古文学学習の歩みを振り返ってみると、単元設定や教材選択が指導者の好みを色濃く反映した、片寄ったものになっているという印象が強い。たとえば、韻文をとりたてて学習する単元がない。西鶴はおろか、芭蕉さえ登場しない。近世については、かろうじて歌論で扱っただけで、ほとんど学習していない。軍記物にしても、ついで程度の扱いでしかない。

今さら言ってみても言い訳にしかならないが、構想段階で消えていった単元もあった。「万葉集」の歌で古代のドラマを物語風に編集してみるとか、「万葉」「古今」「新古今」に俳句も加えて「雪」「月」「花」「鳥」「旅」「死」「恋」といったテーマを設定して鑑賞し、「折々の歌」にならつて二〇〇字で鑑賞文を書くとか。あるいはまた、能因・西行・宗祇・芭蕉ら「旅の詩人」を説話も交えながら列伝的に取り上げ、「教奇」から「わび」「さび」までの美の理念をたどり、旅の時空と文芸について考察するといった大ぶろしきを広げてみたこともある。さらに、講師を招いての『源氏物語』の講演会や、顧問を務める箏曲部を動員して

盛り上げた「百人一首大会」に味をしめた古典芸能鑑賞への発展とか、夢は尽きない。

夢を実現する原動力は、さらに大きな夢を思い描くことによつてもたらされる。そして、その夢は研究の中で育まれ、指導力の錬磨によつて現実のものとなる。改めて精選を期さねばならない。

四 授業の実際―『源氏物語』の場合―

光源氏の生涯は、数多くの女性たちとの交渉によつて導かれていく。その恋のさまざまが源氏にはえげえしい栄耀をもたらししたが、その一方で、彼は人一倍深い憂愁をかかえこまなければならなかった。今回『源氏物語』を教材として扱うに当たつて、恋と権勢とを緊密に重ね合わせて語る斬新な虚構のしくみを理解させ、そうして描き出される源氏の人生の繁栄と内面の苦悩とを読み取らせたいと考えた。以下は、その指導過程の概略である。

〔時期〕 第二学年後期末〜第三学年前期中間考査 一九九七年二月〜六月 約二十五時間

〔対象〕 兵庫県立姫路西高等学校二年〜三年文系(一)五組 各クラス四十名

〔教材〕 「精選 古典Ⅱ 古文編」(明治書院) 「源氏物語読本」(筑摩書房)

一 光源氏の誕生(四時間)
 指導目標 (1) 後宮の秩序と、桐壺帝の更衣に対する愛

との緊張関係が波紋を広げていく過程を読み取らせる。

- (2) 桐壺帝の更衣への愛情が逆に彼女を追いつめていく皮肉なありようを理解させる。
 - (3) 光源氏の類稀な美質と、彼に対する桐壺帝の愛情のありようを読み取らせる。
 - (4) 光源氏がどのような境遇にある人物として物語に登場させられているかをとらえさせる。
 - (5) 敬語を正しく理解し、読解に生かす力を養わせる。
- 二 車争ひ (二時間)
- 指導目標 (1) 文章全体のあらずじ(発端→展開→結末)を把握する力を身につけさせる。

- (2) 六条御息所方、葵の上方とそれに従う源氏の供人の三者の緊張関係の中で、事件が起こる過程を把握させる。
- (3) 「さるものにて」「さすがに」「なかなか」や反実仮想に着目して、幾重にも屈折する六条御息所の心情を読み取らせる。
- (4) プライドの高さと源氏に対する「心弱さ」を中心に六条御息所の人物像をとらえさせる。
- (5) 心情語の意味を文脈に即して的確に口語訳する力を養わせる。
- (6) 六条御息所が光源氏の人生に深い影を落としたこ

とを理解させる。

「心づくしの秋」の学習に先だって、約五十分をかけて桐壺巻から須磨巻までの物語の梗概を語り聞かせた。主な内容は次の三点。

- (1) 「雨夜の品定め」を起点にして、春休みの課題で取り上げた四人の女君と、それに六条御息所を加えて、源氏の女性遍歴について語る。
 - (2) 「紫のゆかり」をキー・ワードにして、藤壺への思慕と密通、紫の上との出会いとその後について語る。
 - (3) 源氏の臣籍降下を起点にして、桐壺帝の讓位と崩御、右大臣方の専横という状況の変化によって源氏が窮地に追いこまれる過程を語る。
- 語り聞かせの際に次の二点に留意した。
- (1) 権勢と愛との緊張関係を常に念頭において語る。
 - (2) 春休みの課題についてできるだけ言及する。

三 心づくしの秋 (三時間)

指導目標 (1) 心情語・歌・情景描写を総合して、源氏

- (2) の郷愁の思いを読み取らせる。
- (2) 須磨での生活の中で供人の眼を通して描かれる源氏的美質や主従の心の通い合いをふまえて、源氏の魅力をとらえさせる。
- (3) 修辞についての理解を深め、古来名文として高く評価されている文章の巧みさを味わわせる。
- (4) 須磨退去が、光源氏の人生において持つ意味について理解させる。

「女三の宮の降嫁」の学習に先だつて、約三十分をかけて須磨巻から藤の裏巻までの物語の梗概を語り聞かせた。主な内容は次の三点。

- (1) 明石の入道の夢を起点に、源氏が明石の上と契り、明石の姫君をもうけて紫の上の養女として迎え取るまでの経過を、明石一族の側から語る。
- (2) 梅壺女御・明石女御の入内を中心に、世俗権力を掌握する(摂関家的ありよう)に至る源氏の栄達を語る。
- (3) 四季と恋の秩序を体现した六条院の造宮と、その主宰者としての源氏が准太政天皇となることで、神聖なる王権を手にしたことを語る。

語り聞かせの際に次の点に留意した。
源氏が天皇の地位には昇りえない運命の中にありながら、王権の体現者となるという、常識では考えられない物語の論理を念頭において語る。

四 女三の宮の降嫁(五時間)

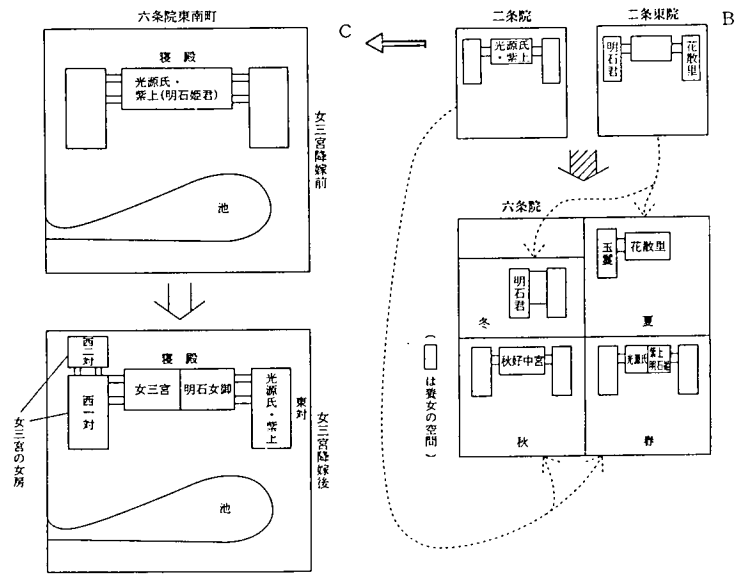
指導目標 (1) 女三の宮の降嫁が紫の上の立場を変化させ、ひいては六条院世界の安定と調和を揺るがすできごとであることをとらえさせる。

- (2) 内面と外面とを峻別して平静を装い、自尊心を保とうとする紫の上の苦悩を読み取らせる。
- (3) 紫の上への愛情と女三の宮への配慮の板挟みになつて苦悩する源氏の姿をとらえさせる。
- (4) 紫の上と源氏との間に生じた心の隔たりを読み取らせる。

(5) 心情語や逆説の接続語に注意して、登場人物の屈折する心情を的確に読み取らせる。

学習活動	指導上の留意点
1 女三の宮を迎えて、紫の上と源氏のそれぞれの思いを読み取る。 (1) 源氏の目に映る紫の上のけなげを読み取る。 (2) 源氏の安堵と番胆の思いを読み取る。	女三の宮の降嫁が大院世界にどのような波紋を広げることになるか、予想させる。 紫の上が「なまはたなく」思った要因を指摘させる。 「いとらうたげなる御ありさま」とは紫の上のどのような態度を指しているのかを説明させる。 「かれこれ」がそれぞれ誰を指すか確認させる。 紫の上と女三の宮とを較べて源氏の思いを一点に整理させる。「ももから」で屈折する源氏の心情を説明させる。
2 互いに苦悩をかかえた源氏と紫の上との会話や歌に込められた思いを読み取る。 (1) 源氏と紫の上の内面の苦悩を読み取る。 (2) 源氏と紫の上との会話が続いていることを理解する。	「なまはたなく思ふれど、つれなみのゆめてなし」と「忍ぶれど、なほものほれなり」の表現の違いに注目させる。 りておしまふ」との表現の遠いところを抜き出す。 源氏の心情を表している箇所を抜き出す。 「思ひ乱る」の内容を、二つの側面からの矛盾・葛藤として整理させる。
3 女房や他の妻妾の眼をはばかりて平静を装い、身持を保つ紫の上の内面的緊張を理解する。 (1) 源氏への信頼を裏切られた紫の上の動揺と不安を読み取る。 (2) 女房たちの噂話となしめる紫の上の言葉が、扱われた君御であることを理解する。	紫の上の述べた、過去・現在・未来と分けて整理させる。 外腹で子供にも通じない紫の上にとつて、源氏の愛だけが生き支えであることに気づかせる。 女房たちの噂話の論理を整理させる。 紫の上の発言の内容を整理させる。 紫の上が「女三の宮へ」の嫉妬心を否認する理由を説明させる。 紫の上の発言に、その口調を想像させる。
4 紫の上と源氏との間にできた心の隔たりを読み取る。 (1) 紫の上の胸に耐える紫の上の心中を理解する。 (2) 「鶴の声」を聞いた紫の上のみ取。	「心の鬼」に着目して、紫の上の内面の葛藤を説明させる。 紫の上の心中思惟の箇所を指摘させる。 紫の上の「思はず」に至つた心中思惟の論理を説明させる。 「鶴の声が般にはどのような思いを起すきたまは身」に注目させる。 「いと入腹なられたまはぬ」「うちも身は身」に注目させる。 「夜深き鶴の声」を聞いた紫の上の心情を説明させる。 源氏の行動に対する女三の宮の板挟みと紫の上の女房たちの反応を確認させる。 源氏の板挟みの苦悩を読み取らせる。 「ももから」に着目させ、紫の上の心情をとらえさせる。
(3) 紫の上と源氏との、ももは修復できなかった心の隔りの源氏を説明する。	

〔授業中に使用した図〕 (三田村雅子『源氏物語—物語空間を読む—』ちくま新書)



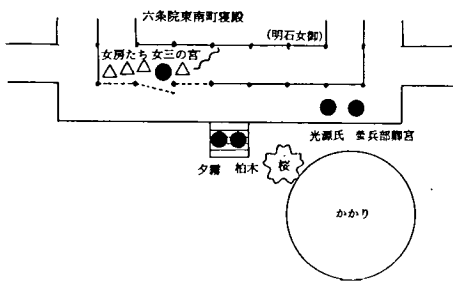
五 御簾の透影(四時間)

指導目標 (1) 六条院の蹴鞠の場面を具体的に思い描かせ、物語世界を視覚化してとらえさせる。

- (2) 女三の宮の姿を垣間見たことについて、柏木と夕霧がそれぞれのような感慨を抱いたかを読み取らせる。
- (3) 柏木が女三の宮を垣間見たことが、源氏の人生にとって決定的なできごと(密通)への伏線になっていることを理解させる。
- (4) 視点の設定の仕方に留意させ、作品世界の構造をとらえさせる。
- (5) 暗示的な表現に着目させ、作品を深く読み味わう姿勢を身につけさせる。

学習活動	指導上の留意点
<p>1 晩春の六条院で催された蹴鞠の華やかさを理解する。</p> <p>(1) 蹴鞠を催すことになった経緯を理解する。</p> <p>(2) 源氏が若いころの思い出を語るこの意味を理解する。</p> <p>(3) 柏木と夕霧が蹴鞠の中心として描かれていることを理解する。</p> <p>2 女三の宮を垣間見た柏木と夕霧の心情を読み取る。</p> <p>(1) 柏木と夕霧が女三の宮を垣間見るに至った偶然と必然を理解する。</p>	<p>・場面と登場人物を整理させ、図に描かせる。</p> <p>・「つれづれなり」「まうさうし」に注目して、「このころ」の源氏の生活を具体的に想像させる。</p> <p>・明石の女御が若宮を出生して参内した後のことであることを確認させる。</p> <p>・蹴鞠が小弓と違って「乱りがはしき」ものとされ、いたこと注目させる。</p> <p>・「貴方の意気なめあへざるを」の一文を正確に解釈させ、発言の意気なめあへざるを「一人、花の上も忘れて心に入れたら」とはどういうことか、説明させる。</p> <p>・源氏が蹴鞠を見物する立場にあることの意味を考えさせる。</p> <p>・柏木の見事な足さばきに注目させる。</p> <p>・「大將の君も」は、どの部分を受けているか、またどの部分夕霧のあでやかなふるまいに注目させる。</p> <p>・「色々こぼれ出る御簾のまづま、透影など」を手がかりに、御簾の内の女房たちのよすがを具体的に想像させる。に注目して、女三の宮方の懐け出す「乱れ事」を捉えさせる。に注目して、蹴鞠の場面に「乱りがはしき事」「乱れ事」「乱りがはしく散</p>

〔蹴鞠場面図〕



- ① 柏木と夕霧の抱いた感慨の違いを読み取る。
 ② 女三の宮への悪態の情に絡めて、夕霧の心中を理解する。
 ③ 柏木と夕霧の抱いた感慨の違いを読み取る。

る「など」、「乱れ」を表す言葉が連続して使われていたことを想起させ、「乱れ」の暗示的な効果の解明を促す。
 ・廣の端めくれの上の暗示的な効果の解明を促す。
 ・「とどみに引き直る人もなし」の首段的な理由とその背景としての女三の宮主従のありようを考えさせる。
 ・「桂委にて立ち給へる人」とは誰のことか確認させる。
 ・女三の宮の描写を項目「衣装／髪／容姿／顔顔／態度性格」に分けて整理させる。
 ・「むべし」「見ゆ」に着目させ、柏木と夕霧の目と心に映じた女三の宮の姿であることに気づかせる。
 ・「かたはらいたし」「いとほし」は、夕霧のどういうことに対する思いか説明させる。
 ・「対するは」に注目させ、夕霧と柏木との女三の宮に対する思いの違いに気づかせる。「心にかかり」も「心」を「か」めたる内に「か」が「か」る。「心にかかり」を「か」めたる内に「か」が「か」る。「心にかかり」を「か」めたる内に「か」が「か」る。夕霧の心中思惟の箇所を指摘させ、その内容を大きく二点に整理させる。
 ・夕霧が柏木と女三の宮をどのように見ているかまとめさせる。
 ・夕霧が女三の宮に対して理性的でありえたのはなぜか、考えさせる。

六 萩の上露 (三時間)

指導目標 (1) 紫の上・源氏・明石の中宮の歌に込められた思いを読み取らせる。

- (2) 紫の上の死が露のイメージで統一されていることに気づかせ、その表現効果をとらえさせる。
 (3) 紫の上を失った源氏と夕霧の思いを読み取らせる。
 (4) 「愛は可能か」というテーマで、源氏と紫の上のともに生きた人生をふりかえらせる。

五 教育と研究—国文学研究の成果を取り込むにあたって—

ちようど「源氏物語」の学習を始めたころ、三田村雅子著「源氏物語—物語空間を読む—」(ちくま新書)が刊行された。以前から、その斬新な論考に惹かれていたので早速買ひ求めて読んでみた。感性豊かな文章で綴られた明晰な論考にひきこまれ、一気に読み通した。そして、これだ

「萩の上露」の学習に先だつて、約二十分をかけて、若菜上巻から御法巻までの物語の梗概を語り聞かせた。
 (1) 女三の宮垣間見を起点にして、柏木と女三の宮の密通、女三の宮の出家、柏木の死、そして薫を抱く源氏の思いについて語る。
 (2) 女三の宮の降嫁を起点にして、紫の上の病惱、出家の意志について語る。

と思った。それまで方法的な読みを授業に取り込むことについて懐疑的であった私は、「血と肉になった方法」がもたらす豊かな読みに圧倒されてしまった。できることなら、この感動を生徒たちにも共有してもらいたい。それが、常日頃感じている古文学習の閉塞状況を打開することにつながるかもしれないという期待を抱くようになった。

源氏研究には、「王権論」から「身体・感覚」へという流れがある（「源氏研究」第2号 座談。三田村氏前掲書では、「王権」ということばは意識的に（？）使われていないが、基本には物語の王権論的な構造が踏まえられている（前掲書1章）。そして、そうした「方法論」からはみ出し、こぼれ落ちてくる「身体」の感覚を解明するところに醍醐味がある。授業では、「王権」という概念を用いて物語の構造の理解を図るとともに、「身体」に注目させることによつて、登場人物の感覚と心情を生々しく感じ取らせたいと考えた。すでに単元を編成してからのことであるから、構想段階での中途半端さは否めない。それを承知の上で、今回の実践の中で、国文学研究の成果を取り込むに当たって留意した点について、まとめておく。

1 概念用語の定義を明確にする

生徒になじみのない概念用語を用いる場合、指導者自身がその定義を明確にしておかないと、混乱を招くだけに終わってしまうかねない。かといって、研究の最先端に付き合うほどの力量は私にはない。そこで、「必携」「事典」類

を頼りに、「王権」については特に次の論考を参照した。

日向一雅「光源氏の王権をめぐって―その系譜と位相

―」（『源氏物語の王権と流離』新典社）

河添房江「源氏物語の喩と王権」（『有精堂』

また、もうひとつのキーワードとして使った「いろいろの」については、次の二著を参考にした。

鈴木日出男『はじめての源氏物語』（講談社現代新書）

* 本書は課題図書の一冊に選んだ。

高橋亨「色」のみの文学と王権―源氏物語の世界へ―

（新典社）

なお、「王権」に関しては、「王権⇄皇権」という使われ方がなされているようだが、私は「神聖王権⇄世俗王権」の語を用いた。「世俗王権」は「政治的権力」と言い換え、日本史で学習した知識に触れるとともに、二年次にたつぷり学習した『大鏡』の世界を想起させた。一方、「神聖王権」については、光源氏の理想性の核をなすと同時に、多くの女性たちとの交渉を通じて彼の存在形式として具象化されていく「いろいろのみ」とかわらせながら理解させるように配慮した。「いろいろのみ」が近世以降の「好色」を連想させやすいことを警戒してのことである。

2 「話し」「聞く」レベルでの理解を心がける

高度で複雑な内容を理解するには、「読む」ことによる方がふさわしいだろう。だから、逆に新しい概念用語を持ち込む場合には、「話し」「聞く」レベルで理解できるとこ

ろまで噛み砕くことが必要になってくる。もちろん、やさしく書かれたものを資料として読ませることも考えられるが、残念ながら「王権論」については高校生を対象に書かれた適当なものが見あたらなかった。「王権論」はまだそこまで市民権を得ていないのであろうか。

3 学習目標と「方法論」の一致を図る

国文学研究の成果を踏まえて、それを生徒たちと創る学習の場においていかに仕組むかというところに国語教育の自立があると思う。「王権論」にしろ「身体・感覚」にしろ、そうした方法的な読みを試みることによって何を指すのかという目標が見据えられていないと、指導者の術学趣味に陥ってしまう。ポイントを絞り、学習目標とそれをおこなえるための「方法論」の一致を図らなければならない。今回の実践では、この点についての事前の検討が甘かったと反省している。

4 「方法論」を効果的に援用する

始めに方法への理解があつて、それを本文によつて検証するといった学習が、あるいは可能なものかもしれない。しかし、それでは本文と方法を有機的に結合させることは難しい。まずは、辞典と文法書、あるいは参考書を片手に本文と向き合う段階がある。口語訳や解釈という作業を行うなかで、何かを探り当てながらそれを説明する言葉を持たないもどかしさを感じているとき、あるいは教材ごとの理解が個々別々のままでつながりを見出せないでいるとき、

そうしたタイミングをとらえて方法論の概念を持ち出すように心がけるべきだろう。本文の読解過程において、「実は」「つまり」という形で方法的な読みを提示することで、解釈のレベルに留まらずそこから一歩踏み出した「なるほど」という発見の驚きを味わいたいものである。

5 「感覚・身体」が開くもの

私は大学時代邦楽部の先輩から「源氏の若紫のおかげでロリコンになった奴がいた」と聞いて、古典の権威が汚されたような不快感を味わったことがある。今になって思うと、冗談をまにうけた自分が滑稽なのと同時に、古典の世界がそういう危ういものをおかかえていることに気付かなかつた不明を恥じる思いがする。たとえば、和泉式部の「黒髪の」の歌を読んでも（あまり授業では取り上げられないと思うが）、教室では肉体的なエロティシズムに及ぶことはまず考えられない。「みやび」や「もののははれ」といった幻想的なことが王朝への憧れを惹起し続けてきたと同時に、それらが古典を権威づけるイデオロギーとして、「身体（感覚）」といった古典世界の豊かさを封じ込めてきたのではなからうか。三田村氏の著書に触れて、「古典」という権威に鎧われてきた自分の古典教育観を反省し、「身体（肉体）」や「感覚」など、おそらく私以上にそれらに敏感に反応する生徒たちの感性を教室で解放できないものかと考えている。もちろん、光源氏を単なる好色漢と見做すのとは違った意味においてである。

【入試のがてく上】
 死は文学の永遠のテーマである。平安時代の物語にも死を扱った場面が頻出する。かかげが人のない人々をつたえしみに代はる代に遇じものがあるが、死を扱った場面が頻出する。かかげが人のない人々をつたえしものである。そうした事柄について基本的知識を身につけておくことは、文章解釈の大きな武器になる。平安時代の「はかなき心遣にわづらふ」（はむ）、「むむ」ことかき夢後思ひを始むる。當時、病は物事のそいだと考へられたから、病者や病の具持病にともなふ思ひを吐行われた。その思ひが現れて、物事が通致すれば病は「近づく」と、「おこたりはつ」出展を「つたは」とうことになつた。「あつし」なり行く。「いよいよ死期がましかし、死を避けさせたり、出展を「つたは」とうことになつた。これは「死後靈魂浄土に往生する」とも考へて居る。しからし、病者が去来した。病後思ひは多くの病は「かひなき事」と見て出展を執り行うことである。生ずるといふ病は「身病物事」などである。病中病は各病思ひを知らず、病者の人々は病生を可憐に考へて居る。病は「病」の病、子に死したたけが位を思ふのは無常の病、死は近衛病を思ひ、火葬して、この「病後思ひ」の道で病を治した。死に死したたけが位を思ふのは無常の病、死は近衛病を思ひ、火葬して、この「病後思ひ」の道で病を治した。死に死する間は、人々を思ひ、病後思ひ、病後思ひを自派した。

- 1 病後思ひ①②の持つ内容を考へよ。
- 2 病後思ひ③とはどういうことか。説明せよ。
- 3 病後思ひ④の「病後思ひ」とは何のことか。
- 4 病後思ひ⑤は病のことか。
- 5 病後思ひ⑥はいつのことか。
- 6 二箇所病後思ひ⑦の叙述は誰に対する叙述を求めているか。
- 7 五の病に用いられている言葉について説明せよ。
- 8 病後思ひ⑧⑨⑩を口述せよ。
- 9 病後思ひ⑪もまた死を思ふ病後思ひであるか。
- 10 病後思ひ⑫は、江戸時代以前の世の中での病後思ひの位置の違ひを比較して、病後思ひ⑫の持つ内容の違ひを説明せよ。